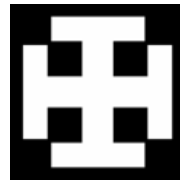


寺町散歩 (3) 「東林山深崇寺」

史談会幹事 村崎春樹

北隣に禅林寺、南隣に三宝寺、西側を寺町通りに接している。深崇寺は慶長年間(1596~1614)中頃から長崎において吉利支丹教徒の激しい妨害にあいながら浄土真宗の布教を、今博多町、磨屋町など住いを変えながら行っていた、肥前唐津の僧浄慶によって、元和元年(1615)現在地に一寺を建てた。当時は寺号は無名であった。この地は浄慶が寺を創建する前にも閑祖と云う禅僧が建てた東禅寺(長崎町人誌は、東林山東福寺であり、東林山の山号をそのままに引継いだと云う)があったが、吉利支丹教徒の妨害によって廃寺となり、その後、町年寄高嶋四郎兵衛の別邸となった後、再び真宗僧了信が一寺を建て真宗布教を行ったが、吉利支丹教徒の妨害が激しく、了信も布教を断念し、長崎を退去するに至る。長崎奉行長谷川権六から仏教布教への功績に対し激励を受けた浄慶が了信から寺地を譲り受ける形で一寺を建てたものである。寛永4年(1627)京都二条通りの深江屋三郎兵衛が浄慶と親交を結び、京都西本願寺から末寺として東林山深崇寺の寺号を得たとされ、言伝えによると深崇寺の深は深江屋の一字を採ったものといわれていると長崎市史地誌編は云う。元禄(1688~1704)の頃、浅岡源太郎は梵鐘を同寺に寄進、鐘楼も、この頃創建され、寛政12年(1800)及び安政6年(1859)、大正6年(1917)に改築されて、本堂前面に在ったが、平成17年(2005)に撤去され、鐘楼門が

装されている。大正10年(1921)当時存在が確認された阿弥陀堂、礼場、看門舎は現存していない。



かせぎ紋



深崇寺鐘樓門の瓦のかせぎ紋

末庵青雲寺は現在廃寺となり個人宅となっている。平成21年(2009)に自動車進入路を新設して境内まで車で参拝出来る様になっている。深崇寺の寺紋は、かせぎ紋で吉利支丹紋である。大正10年(1921)当時深崇寺に在った阿弥陀如来石像、観世音菩薩石像、勢至菩薩石像は元禄4年(1691)園山善爾が阿弥陀橋を架け、その西南側に安置したもので、



明治以後、安置されていた小仏堂が取払われた為、深崇寺内に移し、阿弥陀堂を建て安置されていたが、昭和5年(1930)に八幡町の阿弥陀橋のたもとの阿弥陀堂に戻った。尚、本堂創建の年代は不明であるが享和文化年間(1801~1817)と明治17年(1884)、明治43年(1910)に大修理を行い現在に至る。本堂前には大正2年(1915)11月建立の石燈籠一対が在るが、長崎の碑第10集(長崎南公民館とじょう会)には明治6年(1873)12月建立の石燈籠一対が在ったとしている。



本尊は阿弥陀如来立像(木像)で宝暦2年(1752)に七代住持雅栄の調べによると康雲作と云れている。

この外に、本堂前に石燈籠一対の内側に丸型盤で側面に五三桐紋を刻んだ年代不明の水盤が在る。また本堂左側に文政11年(1828)の年号が刻まれた水盤が在る。境内の一隅に、門下生610名によって昭和2年(1927)に建立された深浦重光先生頌徳碑が在る。

歴代住持は、次のとおり。

開基	浄慶	二代	了盆	三代	不入	四代	了水
五代	梅隆	六代	春翁	七代	雅栄	八代	俊霊
九代	春泰	十代	一乗	十一代	乗桁	十二代	乗専
十三代	乗桁	十四代	乗誓	十五代	乗奎	現住持	元尚、

(次回は三宝寺の予定です。)

17 禅林寺の鐘樓堂と鎮守堂 274×213



寺町の禅林寺境内の鐘樓と鎮守堂越しに立山方面を望んでいる。背景には諏訪神社の長坂を確認できる。本堂前の左側にあたる鐘樓堂は宝永2年(1705)に建立され、文化13年(1816)に改築されている。木造・本瓦葺・切妻造。宝永2年(1705)に奉納された梵鐘には漢詩が鐫込まれ、製作者安山弥兵衛、藤原国久の銘が記されていた。

新設された。庫裡の前面に現在も太鼓樓が在る。この太鼓樓の創建年代は不明であるが、明治20年(1887)に再建され明治43年(1910)に修理され現在に至る。この鐘樓と太鼓樓に酷似している写真が禅林寺の鐘樓と鎮守堂として公表されているが、鎮守堂とされているものと、現存している太鼓樓を比較すると極めて似ており、更に後の白い塀から見て深崇寺の鐘樓と太鼓樓と見るのが妥当と考えられる。山門は嘉永元年(1848)に、鐘樓附近に在ったものを現在の位置に新築されたものであるが、平成17年(2005)に鐘樓と併せて鐘樓門として新築された。この鐘は自動制御にて時刻を知せる様になっている。境内は本堂を除き近代化され庫裡と信徒会館は新築され、地面は舗